

# 樺太での生活経験と全国樺太連盟の活動について

岩 崎 守 男

## 1. 樺太の地理的な特徴

私は一九三七（昭和一二）年に南樺太の泥川<sup>どろがわ</sup>で生まれました。八才で第二次世界大戦の終戦を迎えるまでここで過ごし、北海道に引き揚げてきました。以来、この地を訪れることはありませんでしたが、六十数年ぶりに再訪し、薄々と覚えていた木の葉や山や川などを眼前にしたときには、懐かしさに頬ずりをしたくなるような気持ちになりました。樺太は私にとってそれほどまでに愛する故郷です。そのような感情は、タンチョウの雛が人工孵化で生まれて、最初に見た動くものを親と思うような「刷り込み」に近いと感じました。

樺太は、「樺太島」や「サハリン島」などとも呼ばれますが、島というよりは大陸のような広大さを感じるところです。

樺太の最北端にあるエリザベート岬は北緯五四度二五分、最南端のクリリオン岬（西能登呂岬）は北緯四五度五四分です。ちょうど北緯五〇度線

が樺太を南北にほぼ二等分する中間に位置します。この北緯五〇度線から南端までの距離は四五・六kmあり、これは東京都から和歌山市や明石市までの距離に相当します。私たち旧島民が「樺太」と呼ぶのは、北緯五〇度線以南、すなわち「南樺太」のことです。私自身も島の南端近くに位置する泥川で生まれ育ちましたので、当時は北緯五〇度線を越えて北の方には行ったことがありません。

島の総面積は七万四四一五平方km、南樺太に限ると三万六〇九〇・三平方kmです。南樺太の面積は島全体のほぼ半分、約四八%を占めました。これは東北三県（青森、秋田、岩手）の面積の合計、あるいは台湾島とほぼ同じ面積であり、九州の約九〇%、北海道の約四三%に相当します。

世界を見渡すと、北緯五〇度近辺の都市といえば、カナダのバンクーバー、フランスのパリ、ドイツのミュンヘン、アメリカのシアトルなどが挙げられます。モスクワは北緯五五度、サンクトペテルブルグが北緯五九度ですので、ロシアの主要

都市がより高緯度の地にあることを踏まえれば、樺太はロシアの中でも気候風土の面で条件が良い地域と言えます。しかし、歴史的に西方のヨーロッパとの結びつきが強いロシアは、極東アジアに位置するサハリン（樺太）を流刑地として使ってきました。ロシアにとってサハリンは、少数民族と特殊な状況に置かれているロシア人がわずかに住んでいるという土地でした。

これに対し日本では、樺太は明治以前から、漁業やアイヌ民族との交易などを行うための重要な土地とされてきました。カムチャツカ半島とアムール川を東西の端とする海域の中では扇の要に当たる場所に位置するからです。地理や気候風土の面でも、生活環境や産業活動の面でも、決して不利な地域ではないということです。

「カラフト」という地名は、元々はアイヌ語と蒙古語という二つの言語に起源を持っているとされ、日本で地名として採用されるにあたって「樺太」の漢字が当てられました。

## 2. 樺太における日露国境線の変遷

樺太における日露間の国境線が初めて協議されたのは、一八五五（安政二）年二月の「日露和親条約」の締結時です。このとき、千島列島では択捉島と得撫島の間で国境線が引かれる一方、樺太は国境未画定とされました。一八六七（慶応三）年三月には「日露間樺太島仮規則」が仮調印されましたが、このときも樺太全島は「両国雑居の地」とされています。雑居していたのは両国の国民のほか、樺太に先住していた樺太アイヌやニブフ（ギリヤーク）の人たちもいました。

明治期に入ると、まず一八七五（明治八）年五月に署名された「樺太・千島交換条約」により、樺太全島がロシア領とされる一方で、千島列島は全島が日本領とされました（千島列島最北端の占守島とカムチャッカ半島の間は「国境線」）。なお、この条約により、樺太アイヌの人たちは、日本とロシアのいずれかの国籍を条約発効から三年以内を選択することを強要されました。日本国籍を選んだ人たちは、北海道の対雁（現在の江別市）に強制移住させられています。

その後、日露戦争（一九〇四～〇五年）の講和条約である「ポーツマス条約」（一九〇五年九月四日調印）により、日本は樺太島のうち北緯五〇度線以南の地域、すなわち、南樺太の割譲を受けました。南樺太はこれ以降、第二次世界大戦の終結までの間、約四〇年にわたって日本領になりました。

す。

日本領になった南樺太では、地方行政官庁である「樺太庁」が一九〇七（明治四〇）年四月に設置されました。その庁舎は、当初は大泊町（現在のコルサコフ）に置かれ、一九〇八（明治四一）年には豊原市（現在のユジノサハリンスク）に移設されました。

また、日本領時代の南樺太では産業開発が急速に進められました。先ほども紹介したとおり、樺太は元より漁業の要衝ではありましたが、加えて木材資源が豊富にあったことから林業も盛んになつていきました。

樺太とユーラシア大陸の間の海峡は、一八〇九年に樺太が大陸と陸続きではないことを確かめた間宮林蔵にちなんで、日本では間宮海峡と呼ばれますが、最も狭いところでわずか七～八kmほどしか離れていません。しかも、この辺りの海は冬には凍るので、徒歩での行き来が可能になります。ここを渡って北上すると、アムール川の河口があります。アムール川がもたらす養分、特に鉄分は、樺太全体の植物を大きく成長させる要因になっていると言われます。オホーツク海は栄養分が豊かな海と言われますが、それはこのアムール川の影響が大きい。鉄分は重いので普通は海中に沈んでしまうのですが、冬に海が凍ることが鉄分を島全体に拡散させる役割を果たしているそうです。

## 3. 日本による南樺太統治の始まり

豊原市に樺太庁が移転した翌年の一九〇九（明治四二）年、樺太庁は「樺太案内 渡航移住手引草」という文書を作成しています。後述する道庁赤レンガ庁舎内の「樺太関係資料館」（二〇〇四年開設）に本物が保存されています。

この「案内」には、樺太に渡航するための条件、渡航後に就きうる職業の種類など、様々なことが書かれています。興味深いことに、職種ごとの給料に関する記述もあります。私の父は浄土真宗の僧侶で、新潟の出身でした。「案内」を読むと、僧侶の配置も書かれています。父が僧侶として、どんな環境・条件で、新潟から樺太に渡つていったかが想像できます。

日本の南樺太統治の本拠地である豊原市が建設され、これと同時に始まっていたのが鉄道の敷設です。最初に、大泊と豊原の間をつなぐ鉄道が短期間（五五日間）で敷設されました。その主な目的は木材の運搬で、鉄道で大泊に運ばれた木材は、船で稚内や小樽へと運ばれました。資源輸送を主目的に、南樺太における鉄道の敷設はその後にも続けられていきました。

道内の市町村との関係で言えば、樺太は札幌よりも旭川との関係の方がより強かった覚えがあります。例えば、有力者層や富裕層の子弟の中には、地元の大泊、豊原、真岡の各立中学校ではなく、旭川市の中学校に來ている者も一定数いました。

<資料1> 樺太略年表

年	樺太	その他、日露・日ソ関係など
1635	松前藩、樺太と千島を含む蝦夷地を探検	
1679	松前藩、クシュンコタンに穴陣屋開設	
1739		仙台沖で、元文の黒船事件発生
1778		ロシア船ナタリア号、根室のノッカマップに上陸（蝦夷地初上陸）
1779		ロシア船ナタリア号、根室の厚岸に上陸、交易要求
1785	幕府（田沼意次政権）、初の蝦夷地探検隊を派遣、樺太にも上陸	
1792		初の遣日使節ラクスマン、根室来航、通商交渉
1798	幕府（松平定信政権）、調査隊を蝦夷地、樺太、千島に派遣	
1804		第二次遣日使節レザノフ、長崎来航、通商交渉
1806	文化露寇（フヴォストフ事件）、ロシア兵がクシュンコタンを襲撃	
1807	幕命により、会津藩士が樺太を含め蝦夷地各所に駐屯、対ロシア警護	幕府、蝦夷地全域を直轄化（～1821年）
1809	間宮林蔵、樺太が島であることを確認	
1811		ゴローニン事件発生（～1813年8月）
1853	ロシア兵によるクシュンコタン占拠事件発生	第三次遣日使節プチャーチン、長崎来航、条約締結交渉
1855	「日露和親条約」締結、樺太に国境線を引かず	
1859		「日露修好通商条約」締結
1865	岡本監輔、樺太最北端ガオト岬に「大日本領」と記した標柱建立	
1867	「日露間樺太島仮規則」仮調印、樺太は両国雑居の地に	
1869	蝦夷地を北海道に改称、樺太は北海道に含まず	
1870	樺太開拓使設置（～1871年）	
1875	「樺太・千島交換条約」署名、樺太は全島ロシア領に	
1876	樺太アイヌに対雁への集団移住を強制	
1891		大津事件
1904		日露戦争（～1905年9月）
1905	「ポーツマス条約」締結、南樺太が日本領に（外地扱い）	
1906	最初の鉄道開通（南浜町～豊原間）	
1907	樺太民政署を廃止し、大泊に樺太庁設置、翌年豊原市に移転	「第一次日露協約」調印（～1916年の第四次協約まで）
1910		韓国併合（～1945年）
1914		第一次世界大戦、日露とも連合国側に（～1918年）
1915	「樺太ノ郡町村編制ニ関スル件」施行	
1917		ロシア革命
1918		シベリア出兵（～1922年）
1922		ソビエト連邦建国、「日露協約」無効に
1923	大泊・本斗と稚内との間に連絡船就航	
1925	皇太子裕仁（後の昭和天皇）、樺太視察	「日ソ基本条約」締結、国交正常化
1929	「樺太町村制」施行	
1931		満州事変（～1932年）、翌年満州国建国（～1945年）
1933	3つの製紙会社が合併し、王子製紙1社に	
1937	豊原町が市制施行し、豊原市に	日中戦争（～1945年）
1939		第二次世界大戦（～1945年）
1941	北海道拓殖銀行樺太支店が樺太銀行を吸収	「日ソ中立条約」締結
1943	南樺太を内地に編入	
1945	8月8日、ソ連軍、満州、千島、南樺太に侵攻 8月22日、留萌沖で三船殉難事件発生	
1946	12月、南樺太住民の公式な引き揚げ開始（～1949年7月）	
1948	全国樺太連盟結成、引揚者支援	
1951	「サンフランシスコ講和条約」締結、日本は南樺太の領有を放棄	

※ 一般社団法人全国樺太連盟ウェブサイト掲載「樺太略史」ほか、インターネット取得情報に基づき、2022年2月、編集部作成。

一九二五（大正一四）年八月、皇太子裕仁（後の昭和天皇）が樺太を訪れて、数日間滞在しています。この年は一月に「日ソ基本条約」が締結された年でもあります。これにより、日ソ間の国交が回復され、一九一六年の「ロシア革命」以降不安定化していた両国間の関係がある程度安定しました。

#### 4. 南樺太の人口と基幹産業

南樺太が日本領だった二〇世紀前半期は、日露戦争以降、第一次世界大戦（一九一四〜一八年）、シベリア出兵（一九一八〜二二年）、日中戦争・第二次世界大戦（一九三七〜四五年）と、日本にとって大きな戦争が相次いだ時期です。豊かな資源を有する樺太はこの間、日本の植民地の一つとして、戦争を支える資源の供給基地を担っていたと思います。樺太の日本人住民の数は、公式な記録としては、一九四〇（昭和一五）年国勢調査による三九万四六〇三人というデータが残っています。当時の樺太渡航者の出身地を調べると、半分ほどは北海道が占め、残りは東北地方です。本国では富裕ではない人たちが樺太に渡っていったということ。渡航者たちの多くが携わった仕事は、大きくは以下の二つがありました。一つは林業・製紙業に関わることで、もう一つは製紙業の操業のためにも必要とされた石炭の採掘です。炭鉱は敷香（現在のポロナイスク）を中心とする北東部の地域に連なっており、その北端は国境の北緯五〇度線に接

していました。あわせて、この辺りには木材を産出する豊かな森林（幌内ツンドラ）もあったので、林業・製紙業および炭鉱業に従事する多くの人々が集住していました。敷香には遊郭があったという話も聞いたことがあります。

当時は製紙業が特に盛んであり、当初は三社あった製紙会社（王子製紙、富士製紙、樺太工業）が一九三三（昭和八）年に合併し、王子製紙一社になっています。第二次世界大戦の終戦当時、南樺太には九つの製紙工場がありました。

一方、農業は残念ながら発展させることができず、酪農がわずかに営まれるにとどまりました。後に横綱になる大鵬は敷香の出身で、父親はいわゆる白系ロシア人（ロシア革命に反対して国外に亡命したロシア人）でした。大鵬の両親は南樺太で牧場を経営していました。「稚内市樺太記念館」には大鵬親子の写真も展示されています。

#### 5. 地上戦と引き揚げの記憶

##### (1) ソ連軍の南樺太侵攻と引き揚げ

第二次世界大戦の終戦の一週間前、一九四五年八月八日、ソ連は「日ソ中立協定」（一九四一年四月一三日署名、有効期間五年）を破棄して日本に宣戦布告し、南樺太、千島列島、満州への侵攻を開始しました。

こうしたなかで南樺太では、北樺太から北緯五

〇度の国境線を越えてきた歩兵・戦車部隊による侵攻、艦船による上陸作戦（塔路上陸作戦、真岡上陸作戦）、豊原などへの空襲などが行われました。このソ連軍の侵攻によって犠牲者や自決者も多数出ており、約四〇万人いた樺太の日本人は本土へと引き揚げざるを得なくなりました。

引き揚げにあたっては、以下の三つの方法がありました。すなわち、疎開、密航、公式な引き揚げ（引揚船への乗船）です。

このうち、引揚者の数が最も多かったのは公式な引揚船への乗船です。日本政府と連合国軍の間での協議を経て、公式な引き揚げがスタートしたのは一九四六（昭和二一）年一月からでした。真岡港から函館港への引揚船での移送であり、五次にわたって実施され、一九四九（昭和二四）年七月二三日まで、約四年も続けられ、日本に戻ってこられたのは約二八万人でした。

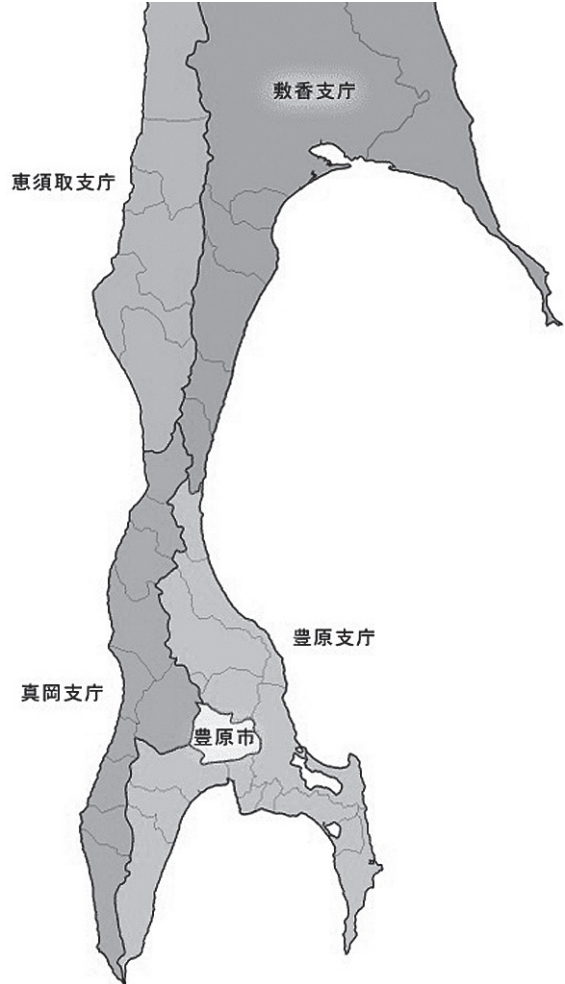
なお、日本政府はかつて、沖縄戦を第二次世界大戦における「国内唯一の地上戦」とする公式見解を持てていましたが、民主党政権期の二〇一〇年五月に見解を改め、これを閣議決定しています。これにより、一九四三（昭和一八）年以降は内地の位置づけを得ていた南樺太へのソ連軍侵攻は、国内で行われた地上戦の一つと見なされるようになりました。

##### (2) 自らの引き揚げ体験の記憶

私の場合、引き揚げの方法は密航でした。島の

<資料2> 南樺太の支庁・市郡・町村の区分 (1941年4月1日現在)

支庁	市・郡	一級町村	二級町村
豊原支庁	豊原市	—	—
	豊栄郡	落合村 川上村	豊北村 栄浜村 白縫村
	大泊郡	大泊町	千歳村 深海村 長浜村 遠淵村 富内村 知床村
	留多加郡	留多加町	三郷村 能登呂村
真岡支庁	本斗郡	本斗町 内幌町	好仁村 海馬村
	真岡郡	真岡町 野田町	広地村 蘭泊村 清水村 小能登呂村
	泊居郡	泊居町	名寄村 久春内村
恵須取支庁	恵須取郡	恵須取町 塔路町 珍内町	鵜城村
	名好郡	名好町 西柵丹村	
敷香支庁	元泊郡	元泊村 知取町	帆寄村
	敷香郡	敷香町	泊岸村 内路村 散江村



※ 国立国会図書館デジタルコレクション掲載、『外地地方行政区劃便覧 (昭和16年4月1日現在)』(拓務省管理局、1941年)に基づき、2022年2月、編集部作成。

※ 全国樺太連盟ウェブサイトより引用。

どもは半額)と米一俵を船主に支払っていました。女性と子どもが優先的に船に乗せられ、当時八才の私と兄はすぐに乗船して、船底に行くよう言われました。九月末でも暑かった覚えがあります。当然、船内にトイレなどはありませんでした。小さな動力船であるにもかかわらず、一〇〇人ほどが乗っており、立錐の余地のないほど定員を大きくオーバーしていました。

乗船時の光景として今でも覚えているのが、二、三人の日本兵が来て、船主に「本土に戻ったらどんなことでもするから、一緒に乗せてくれ」と頼んでいたことです。動力船の後方には小さな磯船が二艘つながれていて、兵士たちが乗せられて

南岸、亜庭湾<sup>ズエラ</sup>の西海岸に住んでいた私たち家族は、一九四五年九月二三日、居住していた泥川から、まず北方にある芳内<sup>ホノカ</sup>へ馬車で移動し、そこから「ポンポン蒸気船」と呼ばれる小さな動力船に乗って逃げました。本土とは逆方向の北方に行った理由は、芳内の海岸は岩場であるため、砂地のように足跡がつかないことに加え、リアス式海岸で見通しがきかず、身を隠しやすかったためです。密航は大抵は捕まって失敗したのですが、私たちは運良く捕まらずに稚内まで逃げ切ることができました。

私の家族は、足に障害のある父、病気で伏していた母、姉二人、兄二人、最年少の私、合わせて七人の家族でした。このうち長兄は一人離れて豊原市にいたため、密航は六人で行いました。船に乗せてもらうために、一人当たり現金一〇円(子どもは半額)と米一俵を船主に支払っていました。

いました。動力船は夕方に出航し、波で大きく下に揺られる過酷な航行を経て、目的地の稚内に辿り着いたのは翌日の昼間でした。後に聞いたところでは、紋別沖まで潮に流されていたため、余計に時間がかかったそうです。上陸時、海水を浴び続けてずぶ濡れになっている兵士たちの姿を見たのを覚えています。芥川龍之介の『蜘蛛の糸』を想起させる光景です。

密航による引き揚げは、私たち家族のように、もともと条件の良い地域に暮らしていないと成功しなかったのですが、密航には密航なりの苦しみがありました。

### (3) 三船殉難事件

一九四五年八月二二日の早朝、留萌沖で樺太からの引き揚げ船三隻がソ連太平洋艦隊所属の潜水艦から魚雷などによる攻撃を受け、大破もしくは沈没するという事件が発生しました。「三船殉難事件」と呼ばれる事件です。

この事件は、先ほど述べた引き揚げの三つの方法のうち、疎開に関係します。三船（小笠原丸、第二号新興丸、泰東丸）は、ソ連軍侵攻から程なく、当時の樺太庁長官が女性や高齢者の緊急的な疎開を決め、そのために用意された船だったからです。本事件の犠牲者の数は、一説には一七〇八人といわれていますが、もっと多いかもしれませ

ん。停戦の数時間前に起きてしまった悲劇でした。

前記の大鵬も、三船の一つ小笠原丸に乗って疎開した一人でした。小笠原丸はまず稚内に寄港し、その後小樽に向かう途中で攻撃を受け、沈没しています。大鵬は、一緒にいた母親が体調を崩して稚内で下船していたため、難を逃れました。

## 6. 全国樺太連盟について

次に、私自身も長く関わっていた「全国樺太連盟」、通称「樺連」についてお話しします。

樺連は、一九四八（昭和二三）年四月に設立され、公益法人（社団法人）の法人格を取得しましたが、公益法人制度改革（根拠法二〇〇八年一月施行）に対応して二〇一四（平成二六）年に一般社団法人に移行しました。会員の減少や高齢化などもあり、二〇二一年三月末をもって解散し、七三年にわたった活動に終止符を打ちました。

樺連は当初、南樺太からの引揚者を援護することを主な目的として設立されました。元々は、樺太庁に勤務経験のある者や、東京事務所の関係者ら約一〇〇人が集まって行っていた引揚者援護の取り組みに端を発し、後で社団法人組織として立ち上げられ、歴代会長に樺太庁長官が就いています。設立当初は主に以下のような生活支援事業を行っていました。

一つは引揚者の住む住宅を確保する事業です。住宅として利用されたのは、戦時中は軍で使っていた兵舎等であり、これを引揚者の住宅に充てました。道内では旭川、帯広、標茶などにあつた軍

の施設が利用されています。

もう一つは、引揚者への給付金の給付を実現させる取り組みです。引揚者は樺太に有していた財産を捨てて逃げてきているので、引揚者の財産の補償を何らかのかたちで公的に行うべきと考え、日本政府との交渉も行いましたが、政府はなかなか腰を上げませんでした。これは当時、千島列島や満州、南洋諸島などからの引揚者も大勢いたからです。こうした状況を踏まえ、「全国引揚者団体全国連合会」と協力して粘り強く政府に補償を求め、「引揚者給付金等支給法」（昭和三二年法律第一〇九号）や「引揚者等に対する特別交付金の支給に関する法律」（昭和四二年法律第一一四号）の制定を実現させました。十分な金額かどうかはともかく、同法に基づき樺太引揚者にも給付金や特別交付金が支給され、私自身も給付金を受け取っています。

樺連は一定の財産を有していました。樺太の豊原や大泊には旧北海道拓殖銀行の支店がありましたが、引き揚げ後、その預金者の中には自らの預金を下ろせなくなっていた者が相当数おり、その金額も相当な額に上っていました。この樺太に残された預金を樺連として貰い受けたのです。

ただし、受け取り方は現金ではなく、諸々の工夫がありました。例えば、樺連の北海道事務所は最初は札幌市豊平区にあり、この土地は拓銀の管理の土地でした。この土地を樺連が拓銀から譲渡を受け、そこに道営住宅と北海道事務所を置き、道庁から納められる土地の借入料を樺連の一定の

収入源としていました。

一方、樺連の本部事務所は東京都港区にビルを持っていましたが、この土地も外務省の所有地であったのを払い下げ受けたものです。元々は樺太庁の所有地であったのを樺連が譲り受けたものです。ビルの賃貸料収入も樺連の活動の財源になっていました。

その意味では、組織形態は公益法人とはいえず、官の息がかかった団体であったとも言えます。

## 7. 樺連による樺太史の伝承活動

引揚者への援護が一段落した後、次に樺連が取り組んだのは、樺太の歴史の伝承に関する取り組みです。北方四島のような返還運動を進めるといふ気運も一時盛り上がりましたが、樺太と北方四島では歴史的な経緯も法律上の位置付けも異なるので、返還運動は難しいとの結論に至りました。残された選択肢が、日本領時代の樺太に関する様々な資料を収集・保存し、それらを通じて歴史を後世に伝えていく取り組みでした。

### (1) 道立資料館の開設に関する要望と協力

樺連から道庁に要望し、一九九二年一月に「樺太関係資料展示室」を設置してもらいました。資料展示室は道庁西一八丁目別館(二〇二〇年解体)の二階にありました。ただ、立地が良いとは言え

ず、ここまで見学に訪れる人の数はごく僅かでした。そのため、より人々が足を運びやすい場所への移転を検討することになり、様々な案の検討を経て、最終的に決定したのが道庁赤レンガ庁舎の二階への移転でした。

資料展示室は二〇〇四年八月、道庁赤レンガ庁舎内に移転し、「樺太関係資料館」に改称され、展示内容の充実が図られました。今振り返ると、樺太出身の堀達也氏が道知事(任期一九九五〜二〇〇三年)に就任したことも、資料館の移転・開設にとって追い風になることだったと思います。移転後は年間七〇万人もの入場者が来ています(二〇一九年からの赤レンガ庁舎のリニューアル工事に伴い、二〇二二年度まで閉館予定)。

資料館の開設に先立ち、樺連の会員から、樺太に関する資料・史料の提出をお願いしたところ、約八〇〇〇点も集まりました。この中には、例えば、日本語とロシア語の両方で書かれた通信簿など、当時の両国共生の証になるような貴重な史料も含まれています。素人には整理すらできないものですが、当時の北海道开拓記念館(現・北海道博物館)の学芸員の方に力を借り、道庁の作法に基づいて整理をしていただいたので、道庁への寄贈時も違和感なくスムーズに進めることができました。

### (2) 「移動展」の始まりとその継続

資料館が開設された頃、道庁本庁一階のスペー

スを使って、道庁各部署が資料展示を通じて自らの仕事を紹介するというイベントが行われており、その一環で樺連も協力して樺太に関する資料を展示することになりました。関係者数名が集まって実際に展示をしてみたところ、意外にも大きな反響がありました。

道庁本庁一階での展示が続いていましたが、その間に、稚内市に在住の樺連会員の方々から、自分たちの地元でも同様の展示をしたいという声が寄せられました。樺連が展示物を各支部に貸し出し、経費と会場は各支部が調達するという開催形式を整えました。これが後に「移動展」として定着する事業の始まりです。当時、樺太からの引揚者が多く住む稚内市では特に大きな反響があり、次に名乗りをあげた美唄市や函館市での移動展にもたくさんの方が入場者が集まりました。この間に、展示資料はさらに充実し、展示方法にも習熟してきたので、内容も濃くなっていきました。

二〇〇四年一〇月、私の地元である釧路市内で移動展を開催することになりました。私自身は樺連釧路支部の支部長を務めていましたので、経費や会場の調達など準備に奔走しました。漁業、炭鉱、製紙業を基幹産業としてきた釧路市は、かつての南樺太の産業の状況に生き写しと言える地域であり、また、人々のつながりの面でも樺太と釧路は深いものがあり、移動展には大きな反響がありました。

釧路市での移動展の目玉の一つとして、日本では珍しい国境石を展示したいと考えました。島国

日本で陸上に国境線が引かれることはまず無く、国境石もありませんが、南樺太を日本が領有していた時代には、北緯五〇度の日ソ国境線に四基の国境石が置かれていました。そのうちの 하나가「根室市歴史と自然の資料館」（根室市花咲港二〇九）に所蔵されています。私はこれを借りるために同資料館にお願ひに行き、同資料館の学芸員などの協力もあり、国境石の展示を実現させることができました。

このようなかたちで移動展を開始し、道内で一回、本州で九回、計二〇回開催しました。私はこの責任者を務めてきました。東京での移動展は、純粋な民間団体であれば借りることすら難しい東京都庁の最上階の展望室を会場に使わせてもらいました。最も遠いところでは、二〇〇七年に京都市でも開催しました。最後の移動展は二〇二一年二月に札幌市（サッポロファクトリー）で開催しました。

二〇〇四年から二〇二一年まで、二〇回に及んだ移動展を振り返って思い出されるのは、展示資料の一つである樺太の鳥瞰図に引揚者やその家族たちが集まってきて、自分が生まれ育ったところや、祖父父母の住んでいたところを探すなどして、なかなかその場から離れないという光景です。中には、移動展がもう少し早く開催されていれば、亡くなった祖父父母や父母にも見せてやれたのにと、涙ぐむ人たちの姿もありました。また、集合写真なども同様で、その中に自分の身内を探し、見つけ出せたときには嬉しさが表情に溢れ出てい

て、それは想像を絶するものでした。さらに、移動展を見た人から後に手紙が来て、自らの事情や思いをぶつけてくることもありました。

このほか、留萌で開催したときには、当時の市長が会場を訪れただけでなく、三船殉難事件に関する副読本（『留萌沖三船遭難〜終戦秘話〜』二〇二〇年七月発行）の発行もしてくれました。移動展を機に、自分たちのまちの歴史を伝えていくことは重要なことだと、あらためて実感してくれただけだと思えます。

以上のような歴史伝承の活動の経験から思い至るのは、「歴史を知ることとは未来を考える土台づくりだ」ということです。私は樺太の歴史を現代や後世に伝えることに一体どのような意味があるのかと自問をくり返していましたが、歴史を知ることには人間の心に触れる部分を癒やする効果があると、移動展の開催を続けるなかで理解するようになりました。それは重要な仕事ですので、樺連がこれまで続けてきた取り組みも決して無駄ではなかったと思っています。

## 8. まとめに代えて―今後への期待

先ほどもご紹介したとおり、樺連は二〇二一年三月末をもって解散しました。解散は、十数年前に行った総会決議により、実際に樺太での生活経験がある者の手によって行うと決められています。

その後、若い世代の会員が入会したり、樺太に関する研究が盛んになり、組織を存続させ、樺連が所蔵している樺太関係の資料・財産を引き続き活用していくべきだという主張もなされるようになりましたが、先人の残した財産を別な目的に利用されても困ると考え、解散を決断しました。私たちの世代の樺太連盟は活動を終えましたが、質を変えて、樺太の研究を進めていくなどの活動については、今後も続いてほしいという気持ちは持っています。

最後に、私が理事長を務めていた社会福祉法人釧路若草会の運営する認定こども園と、サハリン・ホルムスク市にある二つの幼稚園は姉妹関係を結び、四〇年以上にわたって交流を続けています。また、わかき保育園、はるとり保育園の園歌は樺太出身者が作詞したものです。このような市民レベルでの交流は、将来的にも二国間の関係づくりにとって重要なことだと考えます。「歴史は恨むものではなく学ぶもの」と、重く感じています。

へいわさき もりお・元一般社団法人全国樺太連盟釧路支部長  
／元北海道議会議員

本稿は、二〇二一年一〇月一五日に釧路市生涯学習センターにて開催した、北海道近代史研究会・第七回学習会の内容をまとめたものです。  
文責・編集部